

都市生活地域復興センター 準備会だより No.1

創刊号

発行日：1996.6.30

都市生活地域復興センター準備会

西宮市津門西口町7-3

TEL 0798-36-6679

FAX 0798-36-5114

「都市生活地域復興センター準備会」発足のお知らせ

1. 阪神淡路大震災から1年半が過ぎようとしています。その間生協都市生活の組合員・職員は避難所や仮設住宅の人々との交流を通じて被災者の生活を支援・応援してきました。

2. 96年3月まで、そのような組合員の活動を裏方として支えたのが、全国の友好生協のネットワークの力によって生み出された「都市生活 現地救援本部」でした。

3. 震災の被災地では、道路、港湾などの産業基盤や公共施設などの復旧は着実に進んでいますが、人々の生活の復興は遅れており、ある面では悪化しているともいえます。

4. 支援活動を通じて生協都市生活の組合員はたくさん問題に突き当たりました。それらの多くは震災以前から存在していた問題、とりわけ「住居」を含めた地域社

会（地域福祉）に関連するものであることがわかってきました。

5. 他方、国や自治体の災害対策にはコミュニティー（＝地域での生活）の視点が欠落しており、阪神大震災以降もそれを根本的に改めるには至っていません。国の対応のまずさによってうみだされた大量の「難民」が人間らしい生活を獲得できるようになるために、また、今後日本の各地で起こりうる大規模災害に備えるためにも、現行の国による制限を抜本的に踏み越える新たな救済策を講じ、これを定着させる必要があります。

6. 現地救援本部は解消されましたが、生協都市生活ならびに大阪事業連は引き続き長期にわたって上記の観点から地域の復興に取り組む必要性を感じています。

7. 6の目的のために、生協都市生活と大阪事業連は「都市生活地域復

興センター」設立を構想するに至り、5月には「都市生活地域復興センター準備会」を発足させました。事務局は旧現地救援本部と同じく都市生活組合員活動センター内に置きます。

8. 当面、同準備会は旧現地救援本部の仕事を引き継ぐと同時に、センター設立に必要な組織・運営形態と事業計画とを秋口をメドに明らかにしたいと考えています。また旧「救援ニュース」を引き継いで月2回のペースで「準備会だより」を発行します。

9. 被災者は生活の困窮という緊急の問題と街づくりという息の長い仕事との二重の課題を背負われています。今後とも変わらぬ暖かい御支援を賜りますようお願い申し上げます。

数字

現在、仮設住宅や公園のバラックなどで4万世帯を超える人々が生活しています。また県外に一時待避したものの戻って来れない人もたくさんいます。今年の2～3月に兵庫県が行った仮設住宅入居者調査（入居世帯数4万2千6百八十八、有効回答数約3万7千世帯）によると、65歳以上の高齢世帯の比率が41.8%、主要収入源が年金・恩給、貯金、雇用保険のいずれかである世帯が41.3%、年収100万未満の世帯が29.3%、仮設住宅から転出の見込みなしと答えた世帯が92.9%、入院等のため調査不能で有効回答に含まれない世帯3418戸などの数字が上がっています。

1年半を振り返って

「『地域の復興なくして生協都市生活の復興はない』ということの基本に、私たちは救援活動を組み立てて来ました。それは私たちが生協都市生活の組合員であると同時に地域の住民だからです。人と人がお互いに助け合うことから協同は始まります。救援活動を通して『協同する』ということをも身につけ、困ったときもそうでないときも協同することが当たり前になることが大切なことです。そういう願いをもちつつ今年度の活動を進めて来ましたが、まだまだその入り口にただただでした。」（生協都市生活96年度総代会議案書より）

気持ちが通じあえたら

ポートアイランド仮設青空市 一周年を迎えて

「自分の住んでいる地域に仮設住宅ができたけど、買い物に不便みたい。都市生活の消費材を安価に供給できないかしら」と気楽(?)に始めたポートアイランド仮設青空市を始めてから一年が経ちました。毎週水曜日に四ヶ所の仮設をまわります。実際にやってみるとかなり忙しく、おまけに相当な重労働(生協の配達職員みたいな仕事です)。それでもがんばっているうちに楽しさ(=コミュニケーション)がわかってきました。この春からは一部で実験的な共同購入方式を取り入れ、その成果の上によいよ7月からは予約注文制にも取り組みます。

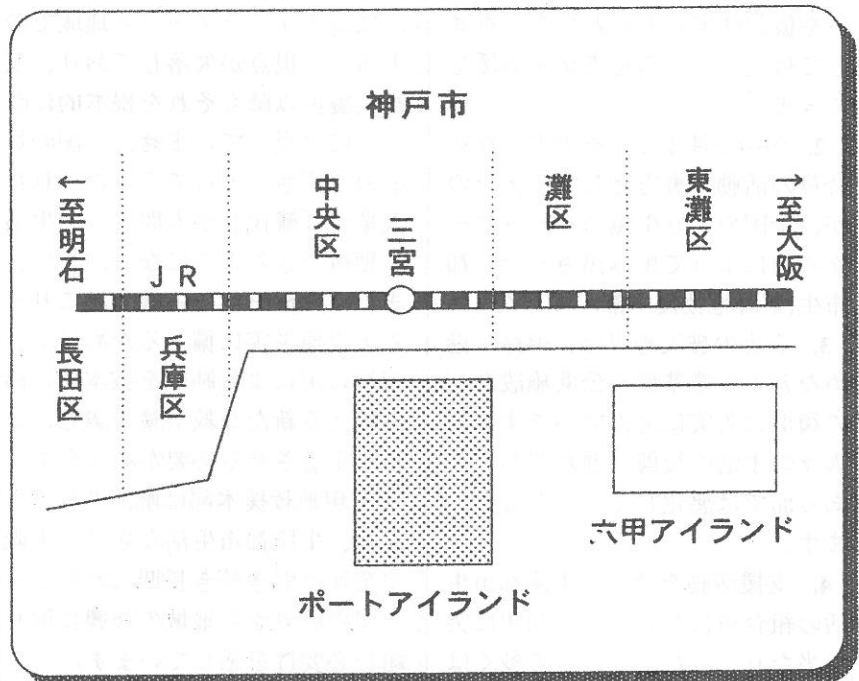
元気を返せたら

「あ!今日、水曜日だ」。つらいとおもう気持ちより、「いつもの人、来てくれるかな?」と期待のほうが大きいのはなぜでしょう。一年間休まずに、出掛けられたのはなぜでしょう。それは、きっと仮設の人の喜ぶ笑顔が見られるという思いがあったからにちがひありません。

夏の強い日ざしの中、自転車をとばして四ヶ所の仮設を回り、額に汗して、魚や野菜などの消費材を売ってまわります。私たちの到着を待ちわびて、「待ってたよ」の声で迎えてくれる人々。その声を聞くと、暑くても寒くても「来てよかった」と思います。顔なじみになると、「うちの包丁、使っていいよ」「トイレ大変だからいつでも声かけてね」と気軽に言ってくれます。ありがたい限りです。

一人ぐらしの人は、品物を買にくるというより、話を聞いてほしいので買い物そっこのけで、世間話に花が咲きます。その会話の中で仮設の人がもっと元気になってくれたらいいなア、と思います。そして、私達もその元気を増強して、仮設の人に返してあげたい。青空市を通して仮設の人同士のコミュニケーションの場を提供できたことを嬉しく思いながら、また来週行こうという希望が湧いてきます。

都市生活東神戸支部
赤井 紀代美



ことばを積み重ねることから

“こんにちは”から始まって“また来週”で終わる会話がもう一年続いている。“継続は力なり”というけれど続けることの大切さを本当に痛感している。というのも、初めのうちはとても事務的で他人行儀だったのがいつの頃からか、お互いに気安さが出てきたのだ。仮設の人は少しずつ自分の話をしてくれるようになり、私たちはいつもきている人が顔を見せてくれないと“きょうはどうしたのかな?”と気にしたりするようになってきたのだ。

水曜日の午後1時から4時の間に4ヶ所まわるとても忙しい青空市で、1ヶ所たった30分のわずか

な時間だが、1年も続くと知らないうちに積み重ねられたコミュニケーションがしっかりとできていたのだ。仮設の人は楽しみに待っていてくれ、私たちは、その喜ぶ顔見たさに青空市に行く、というようにお互いの気持ちが引き合っただけで今まで続けてきたのだと感じている。

仮設の人にとって、震災の傷はまだ深く残っていると思う。これから先の見通しが全く立たない人が90%といわれる中で週1回のたった30分の時間をこれからも大切にしていきたいと思い新たにしている。

都市生活東神戸支部
岡部真紀子